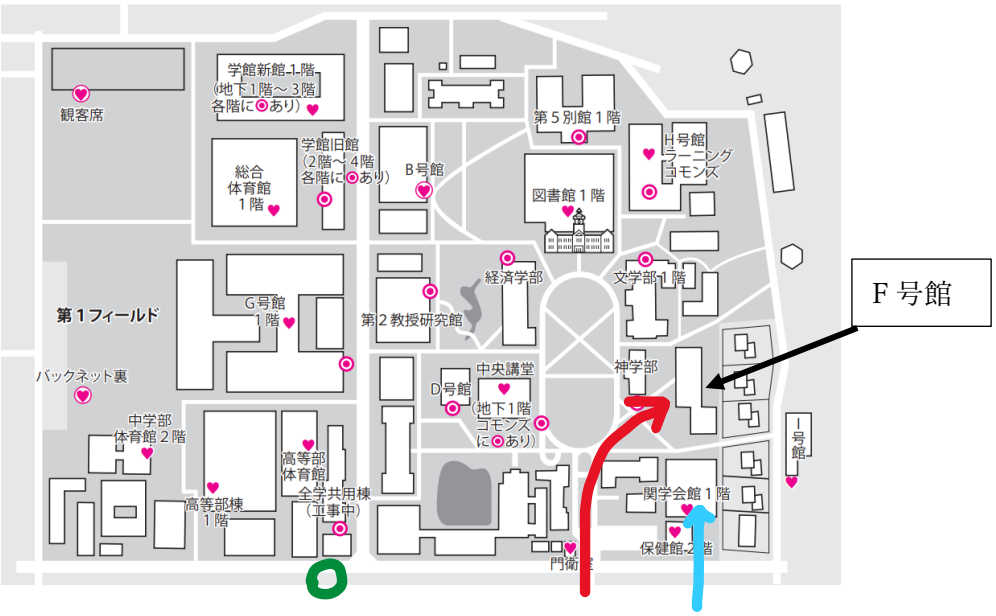
日本ジョンソン協会　2023 年度（第 55 回）大会プログラム

日時： 2023 年 7 月 8 日（土）13:00～17:30
会場： 関西学院大学上ヶ原キャンパス F 号館 203 号室
〒662-8501　兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155
参加費： 会員無料　当日会員 500 円

＊感染予防のため、本年度も昼食会およびコーヒータイムを設けません。昼食は各自済ませて、大会にご参加いただきますようお願い申し上げます。公式の懇親会も見合わせます。
＊会場へのアクセスについてはこちら（https://www.kwansei.ac.jp/access/uegahara）をご覧ください。JR 西宮駅から、阪急バス（甲東園行き）で「関西学院前」下車（約 18 分）。もしくは阪急甲東園駅から、徒歩（約 12 分）もしくは阪急バス（2 番のりばから、関西学院前～XXX 行き）で「関西学院前」下車（約 5 分）。
＊近隣に宿泊施設はございません。宝塚駅近辺か、大阪梅田近辺か、神戸三宮近辺のホテルをご利用ください。いずれの場所からも阪急電鉄で甲東園駅までアクセスできます。
＊キャンパス内の地図は以下の通り。赤い矢印に従って正門を入り、F 号館（会場）にお越しください。



なお、コンビニが緑の丸印の場所、関学会館内のレストラン「ポプラ」が青い矢印の場所にございます。

【タイムテーブル】

12:30~　　受付開始
13:00-13:05　開会（総務委員挨拶）
13:05~14:20　１．講演
「ラシーヌとシェイクスピア」
司会：横内一雄（関西学院大学教授）
講師：永盛克也（京都大学大学院文学研究科教授）
14:20~14:30　休憩
14:30~15:00　２．総会
15-00~15:15　休憩
15:15~17:30　３．シンポジウム
「ギャリックと 18 世紀演劇文化」
司会・講師　佐々木和貴（秋田大学名誉教授）
講師：小西章典（大同大学教授）
三原穂（愛知県立大学教授）
岩田美喜（立教大学教授）
松田幸子（高崎健康福祉大学准教授）
17:30　　閉会

＊大会・総会の出欠の登録のお願い
大会・総会の出欠につきまして、下記のリンクよりご登録ください。特に総会を欠席される方は、委任状に関するご回答をよろしくお願い申し上げます。登録の締め切りは 6 月 19 日（月）です。
(https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSc3neohmQwY4oVztpxSRyad5-dtVYltHQsACDXNDNSK_RkrDw/viewform)

＊当日会員
当日会員として参加ご希望の方も、上のリンクからお申し込み下さい。その際、ご参加希望者のご氏名の後に、所属とともにご紹介者のご氏名をご記入下さい。参加費は 500 円です。

＜講演＞

「ラシーヌとシェイクスピア」

司会　横内一雄（関西学院大学教授）
講師　永盛克也（京都大学大学院文学研究科教授）

仏文学史においてロマン主義の最初のマニフェストとされる『ラシーヌとシェイクスピア』(1823)の中でスタンダールはこう述べている。「現代の劇は古典主義的規則から解放され、韻文ではなく散文で書かれ、自国の歴史を題材とすべきである。」フランス・ロマン派はラシーヌという名に代表される因襲に縛られた古典主義からの脱却の糸口をエリザベス朝の劇作家に求めたのだ。しかしこのやや性急で声高な主張は悲劇ジャンルについてのより本質的な問題—劇言語の抽象化、物語の古代世界への投影、様式化—についての議論を封印してしまったのではないか。英仏の文学を代表する劇作家を比較考察することこそ近代悲劇をよりよく理解する手掛かりとなるのではないか。

＜シンポジウム＞

「ギャリックと 18 世紀演劇文化」

司会・講師　佐々木 和貴(秋田大学名誉教授)
講師　小西 章典（大同大学教授）
講師　三原 穂　（愛知県立大学教授）
講師　岩田 美喜（立教大学教授）
講師　松田 幸子（高崎健康福祉大学准教授）

デイヴィッド・ギャリック(1717-79)が、18 世紀における最も傑出した演劇人であったことは異論のないところだろう。また近年では、役者・劇作家・演出家・劇場経営者といったその多彩な側面に関する考察に加えて、彼のイメージ操作やメディアとの関わり、あるいはその企画によるシェイクスピア・ジュビリー(1769)をとりあげて、社会・文化史的な考察を試みた研究も次々に現れている。そこで本シンポジアムでは、こうした新たな批評動向も視野に入れながら、彼の仕事を 18 世紀の演劇文化さらには同時代の多様な事象との関わりの中で捉え、その意味と意義を再考してみたい。

「“Signor Shakespearelli”と 1750 年代のロンドン・オペラ」

小西章典

作曲家ヘンデルが実質的な活動を終えていた 1750 年代のイングランドでは、たとえば、ロンドン初のオペラ歌手兼劇場経営者となるイタリア人 Regina Mingotii が大陸での興行経験を経たのちに King's Theatre の舞台に立って人気を得る。ロンドンのオペラ・シーンは、かわらず大陸の動向の一部に組み込まれていた。これと軌を一にするかのように、ギャリックは“An Opera”というサブタイトルをもつ 2 つのシェイクスピア翻案作品——*The Fairies* (1755)と *The Tempest* (1756)——を Drury Lane の舞台にかける。本発表では、ギャリックによるこの 2 つのシェイクスピア翻案を、オペラをめぐる 1750 年代ロンドンの劇場間、さらには、イギリスと大陸間というコンテクストにおき、その文化的意義をテクスト上に探ってみたい。

「オシアンからシェイクスピアへ——デイヴィッド・ギャリックの‘bard’の源泉」

三原穂

18 世紀後半のスコットランドにおいて活躍した学者ヒュー・ブレアは、シェイクスピアの影響を受けた悲劇『ダグラス』の著者ジョン・ヒュームそしてエディンバラ大学教授アダム・ファーガソンとともに、ジェイムズ・マクファーソンに、古代ケルトの吟遊詩人(bard)であるオシアンのつくったゲール語古詩を翻訳させるに至った。デイヴィッド・ギャリックがシェイクスピア生誕 200 年祭においてシェイクスピアを‘bard’と呼んだのは、マクファーソンによるオシアン詩の翻訳からギャリックが間接的に影響を受けたためであることが指摘されてきたが、本発表では、もう一人別のスコットランドの文人アレグザンダー・カーライルに注目しつつ、マクファーソンとギャリックを直接結びつける証拠を新たに提示したい。

「ギャリックと批評的行為としてのシェイクスピア記念祭」

岩田美喜

失敗として名高い 1769 年のシェイクスピア記念祭は、近年社会文化史的な側面からの再評価が進んでいる。その一方で、こうしたアプローチは記念祭を演劇人ギャリックの仕事としてとらえる伝統的な立場の否定につながることが多い。

だが、ギャリックは舞台（stage）とテクスト（page）が対立するロマン派的シェイクスピア解釈以前の時代を生きた、演技がそのままシェイクスピア批評と看做される最後の役者であったし、それゆえにこそフランス新古典主義者たちのイギリス演劇理解に関しても大きな役割を果たしてもいた。さらにキャリア後期のギャリックは、二度の大陸旅行（特に 1763-65 年の外遊）で培った大陸ヨーロッパ知識人との交友関係を重視してもおり、記念祭が彼らの目を意識したギャリックの批評家的自意識の発露ともなり得ていた可能性もまた

否定はできない。本発表では、シェイクスピア記念祭が当時有していた文脈を改めて精査し、こうした様々な視座が交錯する場として考え直してみたい。

「ギャリックと 18 世紀のランドスケープ」

松田幸子

1769 年のシェイクスピア・ジュビリーにおいて、ギャリックはシェイクスピア信仰にふさわしい巡礼の地としてストラトフォード・アポン・エイヴォンを特権化した。そのひとつが、エイヴォン川の川辺に巨大なロタンダを建設することであった。このロタンダは、人気のレジャー・スポットであったロンドンのラニラ・ガーデンのものを模したもので、18 世紀における庭園というファッショナブルな空間の構築を代表する建築物であるといえる。本発表では、ギャリック自身がハンプトンにある自身のヴィラにつくったシェイクスピア・テンプルや、ギャリックとコールマンによる『秘密結婚』（1766）における庭園のシーンに触れながら、ギャリックが庭園と演劇とをいかに接続し、18 世紀のランドスケープを作り出そうとしていたのかを考える。

「ギャリックのふたつの伝記」

佐々木和貴

以下のふたつの代表的「ギャリック」伝を比較することで、彼の「名声(Celebrity)」が死後にどのように構築・確立されていったのかを考察する。

Thomas Davies, *Memoirs of the Life of David Garrick,* 2 vols. London, 1780.
Arthur Murphy, *The Life of David Garrick*, 2 vols. London, 1801.

具体的には、生前の彼の仕事のどこに焦点が当てられ、死後にどのようなイメージ操作が行われているのかを確認してみたい。また、ギャリックをケース・スタディとして、18 世紀に出現した「著名性（Celebrity）」という新しい概念へも、話を広げることができればと考えている。